毛の国よ ②

第4部・有機とともに

病の妻思い 兼業生活

原点

「30㌃で有機栽培を行うと聞けば、多少とも農業を知る人は耳を疑います。それほどの面積で有機が可能なのか、親の代からの篤農家か、と」

原発事故の風評被害で経営危機に陥った浦部農園。修(61)、真弓(61)夫妻が常連客に送った手紙は、こんな書き出しで始まる。

下降線の時代

「けれど実態は、東京まで片道2時間半かけて通勤する夫と、難病を抱えた妻が、二人三脚で取り組んだ兼業農家がはじまりでした」

藤岡市の農家の長男、修と、岐阜県多治見市で窯業を営む家の次女、真弓が出会ったのは中央大学のサークル。その後ともに東京都職員に採用され、1975年に結婚。修は親に農業を継ぐと期待されていたが自身にその気はなく、日本が高度経済成長を遂げ、農業だけが下降線の時代に親も無理強いできなかった。

長女が生まれ、マンションを購入し、仕事も任され、公私ともに充実した毎日を送っていた二人に、その日は突然、やってきた。

82年、真弓32歳の冬。「妻が病に倒れました。風邪かと思った症状が治まらず、全身に炎症を繰り返し…」。激しい痛みに焼かれる日々が始まった。半年後、原因不明の難病、ベーチェット病と判明する。

入退院を繰り返すばかりで症状は改善しなかったが、痛みに耐えながら仕事は続けた。「都を辞めたら独立した人格を失うようで恐ろしかった」。真弓はそう振り返る。しかし、84年に次女を出産してから一気に悪化。ついに目にまで症状が現れた。「このままいけば失明というところまで追い込まれ、必死にしがみついてきた職を私はとうとうあきらめたのでした」。発病から8年がたっていた。

そして、このとき、修も重大な決断をする。

「医者も薬もだめなら空気と食べ物しかない」

1㌃の田畑

藤岡市・庚申山の麓にある修の実家の1㌃の田畑。90年にマンションを引き払い、夫妻が農家としての一歩を踏み出した場所だ。修は化学物質に過敏になった真弓のために、すべての作物を有機栽培に切り替えた。

前途は多難だった。「年老いた両親と病身の妻、幼い子どもを抱えていては仕事を辞めるわけにはいきません」。藤岡から都内まで片道2時間半かけた兼業生活が始まった。

朝5時半に家を出て、帰宅は午後9時近く。土間でむすびを頬張りながら着替え、真っ暗な田に出る。キャップライトの明かりを頼りに、時には辺りが白み始めるまでひたすら草取り。

「夏の間は布団で寝たことがなかった」。有給休暇は田植えと稲刈りで消え、年末年始は堆肥散布。そんな生活が抑草技術が確立するまで13年続くことになる。

一方、藤岡に転居直後は一日床に就いていた真弓だったが、症状は薄皮を剝ぐように和らいでいった。

（敬称略）

修が兼業生活をしていた頃の水田。中央の人影は早朝、黙々と1人で草を取る修＝1995年7月